



科学文明は何処へ行く

渡辺幸博

科学文明の先行きは一体どうなるのだろうか。もちろん、いまの私に、それが分かるわけはないが、もはや私たちには、この科学文明を生きる以外、いかなる方途も残されていないことを思えば、ことはただ分からぬといつて済まされるような問題ではないということになる。およばずながら科学文明の展望を試みる次第である。

今世紀における科学技術の発展は、とくにめざましいものがある。わけても、量子物理学と分子生物学は、まったく新しい科学として従来のそれと一線を画しているといわねばならない。前者はニュートン力学の枠にはまらない、日常的経験や常識的現象を絶したミクロ物理学の分野を開拓し、後者はこれまで手つかずで残されていた生命の領域への物理学の進出を意味するものであって、いずれも思考の大転換を要求する出来事であったといえる。

そして、このことは科学的認識の底知れぬ可能性を暗示するとともに、科学的研究がいよいよ門外漢のあざかりることのできない高度に専門的なものになってきたことを示しているという事実を認めざるをえないからである。

とはいっても、科学の成果は技術を介してしか具体的影響をもたらさないではないかといふ。これららの研究が、同時に人類の存亡にもかかわりかねない重大で深刻な状況を生みだしている。

もっとも、科学の成果は技術を介してしか具体的影響をもたらさないではないかといふ反論も可能であろうが、問題は、それだけになおのこと科学をコントロールすることは難しいのではないかというところにある。おそらく、科学が何処を目指して走っているのか、科学者自身にすら分かつていいのではないか。

それはともかくとして、こんにち科学研究の大部分が技術との緊密な連関のもとに行われているのは周知のとおりである。その意味では、さしあたっての問題が技術の段階でのコントロールにあることは疑いないし、現にこの種の努力が行われているのは事実である。このことに関連しているのであるが、P・B・メダワー（イギリスの生物学者、一九六〇年ノーベル医学・生理学賞受賞）は科学技術文明に対する故なき批判は敗北主義以外の何ものでもないといっている。しかし、たとえば「技術的原因による弊害には必ず技術的療法がある」という彼の言葉も、核爆弾はいうまでもなく、原発という大火薬庫の上に住んでいる現状ひとつを思うだけでも、にわかに信じ難いのは私だけではあるまい。

もちろん、科学文明のもたらした正の面を強調し、バラ色の青写真を描くことは、それ程難しいことではないであろうが、たしかに根拠もなしに楽観的見通しを述べることは責任のそりを免れることはできないであろう。

科学文明の未来をいいあてることは難しいが、こうなっては困るという注文はできるし、少なくとも、そのことだけは声を大にして主張しなければならない。

新春早々、まことに冴えない話に終わつたが、年頭に当たつて、私たちの時代の命運に真摯に思いを馳せることも、また大切なことではないかと思っている。

（文学部教授）

千里眼

文學青年や
れ甚だしき頃、
林達夫に読み耽
つたことがあ
る。いきなり著
作集（平凡社・
全六巻・昭和46
47）だったか
なことをしたものの、星を
求める蛾のねがいで、辛うじて
「読書人」という言葉を恐る恐
るそっと受け取った。あれはき
つて、林達夫ともあろう人がこ
んな些細なことに目撃するとは、
どう負け惜しみの精一杯
のせめでも微笑苦だったに違
ない。「虎の巻」全廃論（著
作集4巻）と題するわずか二頁
にも満たない小文が、不思議と
却つて記憶に残ることになった。
▼ところが語学教師として教壇
に立つて十年、「虎の巻」は我が
不眞面目の敵となつた。やはり
林達夫は事の核心しか触れない
のだとまたしても思い知つた。
その小文の一節を引く。▼「（虎
の巻）が」眞の自習を無効にして
しまうからだ。ほんとうに身についた鍛えられた学力
とも労力の「無駄」と時間の「空
費」とを伴う「勉強」の機会を
空にしてしまうからだ。ほんとう
によお手軽な自習などからは
決して養成されるものではない
。▼高校時代に懇切丁寧い
所に手が届く教科書準備英語
ガイド・ブックのミルクで育つ
たこのミルクを飲まなければ
必定なのが当時の大学生に
大學受験戦線に遅れをとること
は「時代の大学生に、
英和辞書を引く工夫、苦心、
練磨」が果たして見られるであ
るが、當時あたかも学年末試験
の季節である。林達夫への「チ
ェローネ」を試みえず、「虎
の巻」全廃論の次の言葉で結
ばなければならぬこの悲しみ
を君は知るや。——「虎の巻」
だけは徹底的に禁止する方がよ
いのではないかと考える。これ
は「教科書」の機能を弱らせる
最も有毒な寄生虫として駆除に
値するのみである。（T.O.）

